

# 茨城県潮来市における水郷空間の観光コンテンツ化プロセス

坂本優紀・松山周一・郭 慶玄・ZOU SIQI・小原悠太  
狩野仁慈・黄 天楽・伊藤大生・秋山千亜紀

本稿は、茨城県潮来市における水郷の変容を住民の生活と観光地化に着目しながら明らかにした。水郷として栄えた潮来であるが、1950年代以降、水路の埋立てや河川の拡幅・護岸工事が進展した。それに伴い、住民は舟での水上交通から陸上交通に転換するなど生活様式が大きく変容し、それまでの生活に根ざした伝統的な水郷景観は喪失することとなった。しかし、同時期に映画や歌謡曲の舞台として潮来が取り上げられたことで、コンテンツ・ツーリズムの対象地として人気を博すこととなった。コンテンツの内容は、舟を用いた生活などの水郷景観であったため、住民の生活の場としての水郷から、メディアによって創造された新たな水郷空間へと潮来は変容していった。現在の潮来では、こうした水郷空間と歴史的な資源を組み合わせることで観光を推進している。

キーワード：観光、水郷、生活、コンテンツ・ツーリズム、茨城県潮来市

## I はじめに

### I-1 研究の背景と目的

近年、観光は地域振興の方策として全国各地で様々な活動が行われている。取り組みの内容は各地域により異なるが、歴史や文化といった地域固有の観光資源を活かし、地域らしさを表現することで、他所とは異なる観光資源の提供が期待できる。その一方で、地域の歴史や文化は常に動的に変化しており、観光資源として観光者に提示されるのは、ある時点における一側面でしかたえない。また、観光資源化においては、ホストやゲストが価値づけしていくこと、つまり人々のまなざしの変化が起爆剤となる（高橋ほか、2018）。すなわち、観光資源として提供される地域の歴史・文化は、ホストあるいはゲストにとって有用性があり、操作可能なコンテンツであることが指摘できる。太田（1993）は、特にホスト側からのこの操作を文化の客体化として取り上げ、文化の担い手である住民が、地域のイメージや物語を積極的

に再生産していく様を報告した。

他方、地域のイメージを創出し、拡散させる最も強い装置としてはメディアがあげられる。メディアが誘発する観光、すなわちコンテンツ・ツーリズム<sup>1)</sup>に関しては多数の研究がみられ、地域への影響を明らかにした研究（金、2015；川添ほか、2018）やメディアを通じた地域イメージの構築に関する研究（中谷、2007）など、様々な観点からなされている。特に近年は、聖地巡礼と呼ばれるアニメに登場する場所をめぐるツーリズムが台頭しており、その観光形態は多様化している（上田、2011；石坂ほか、2016）。

メディア誘発型のツーリズム形態は、地域のコンテンツを消費する点では地域文化を資源とする観光と似ているが、住民よりも観光者の有する情報量の方が多いという点が異なる。本来、観光地の情報は地域住民や観光を促進する地元のアクターが、旅行者に比べて多くの情報を有していることが多い。そのため、観光地のマネジメントは地域住民によってなされる。しかし、コンテンツ・

ツーリズムにおける観光資源はコンテンツの世界観や登場人物などが中心であるため、観光者の方が情報を多く持っていることが特徴としてあげられる(岡本, 2010)。また、コンテンツ・ツーリズムは情報社会における新たなツーリズム形態であり、情報の組み合わせと共有によって意味づけされた場所を消費していく観光形態である(山村, 2014)。したがって、コンテンツ・ツーリズムの観光形態は従来のツーリズム形態とは異なる形であり、観光空間もまた多様になっていると考えられる。

一方、メディア誘発型のツーリズムをコンテンツ・ツーリズムとして一括して扱うことには問題がある。それぞれメディアの有する特性によって、さらには同じメディアの中でも場所の表現方法の差異によって、観光形態が異なってくると考えられる。例えば、近年のアニメが誘発するツーリズムにおいてよくみられるような、観光地ではない現実世界の描写によって、それまで観光者が来訪しなかった場所<sup>2)</sup>が観光地へと変容するパターンがある(山村, 2008; 上田, 2011など)。他方、既存の観光地をコンテンツの舞台とすることで、すでにあった観光空間に上塗りをするように、重層化していく様子もみられる(増淵, 2019)。

コンテンツ・ツーリズムにおける地域の変容については、こうした様々な観点から議論する必要がある。そこで本稿では、地域がコンテンツ化される中でどのように観光地が変容していったのかを考えたい。その際キーワードとするのが、地域住民の生活様式である。コンテンツ・ツーリズムによる観光地化によって地域に新たなイメージが付与される過程で、地域住民はいかにそのイメージを受容し、あるいはイメージと距離をとったのかという意思決定を、生活との関わりに着目していく必要がある。それは、先述したような地域住民が地域の文化や歴史としてどのコンテンツを選択し解釈していくのかという、文化の客体化のプロセスの解明にも繋がると考えられる。

また、コンテンツ・ツーリズムの課題として、一過性のブームで終始してしまい、その継続性が

難しいことが見てとれる(Riley et al, 1998; 鈴木, 2010)。特に、近年はコンテンツの入れ替わりが早いため、地域に浸透する前に観光が終焉してしまうことも多い。他方、コンテンツを活かし、長期的に観光を継続させている地域もみられ、長期的時間スケールでコンテンツ・ツーリズムの実態を明らかにする実証的な研究も必要である。

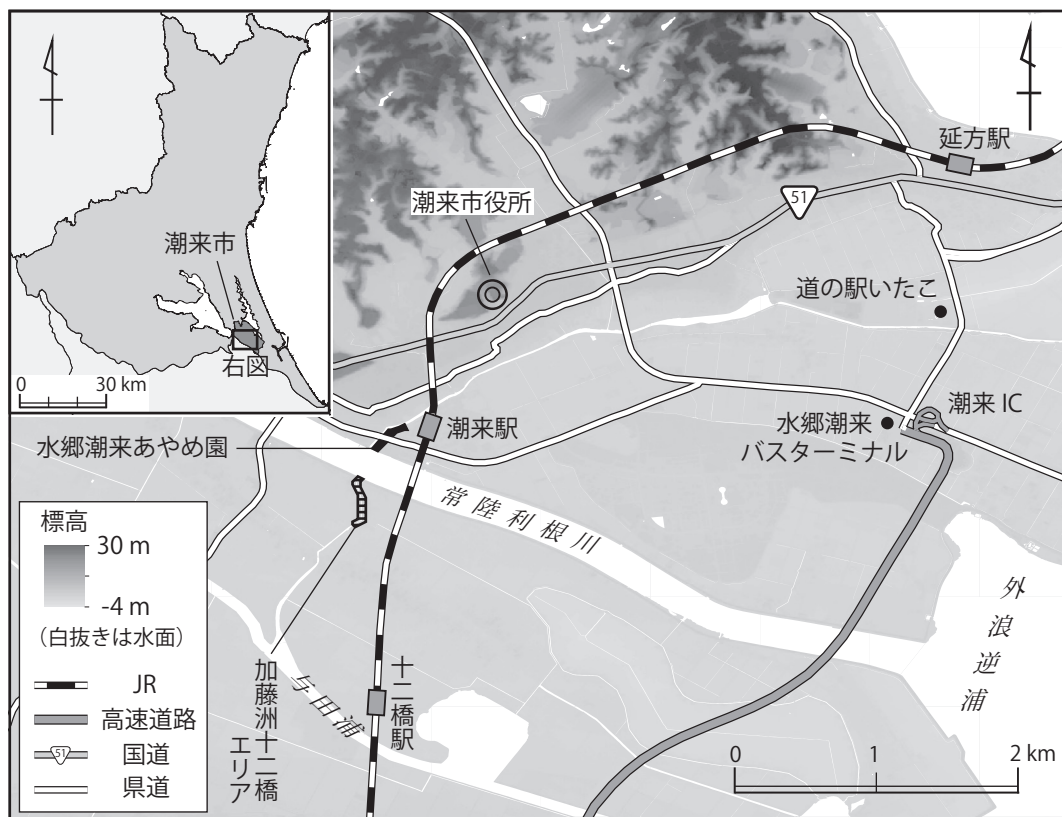
以上の背景のもと、本稿では住民の生活様式の変化と地域のコンテンツ化に着目しながら、茨城県潮来市における水郷空間の変容と観光コンテンツ化を明らかにすることを目的とする。

本稿の研究方法は以下の通りである。まず、コンテンツ・ツーリズムが進展する前の地域の様子を住民への聞き取り調査や資料を用いて整理する(Ⅱ)。その際、コンテンツの対象となる要素が地域特有の住民の生活であったため、特に住民の生活形態の復元を主眼におく。そして、コンテンツ化の内容を資料から整理し、実際の地域変容と比較する(Ⅲ)。次いで、近年の観光動態の変化や推移を行政や観光に関わる業者、住民への聞き取り調査から示す(Ⅳ)。以上を踏まえて、コンテンツ化による水郷空間の変容を明らかにする(Ⅴ)。

## Ⅰ-2 研究対象地域概要

本稿の研究対象地域である茨城県潮来市は県南東部の鹿行地域に位置する(第1図)。市域は、行方市、神栖市、鹿嶋市、千葉県香取市と接しており、人口は29,111人(2015年現在)である。なお、潮来市は2001年に行方郡潮来町と行方郡牛堀町が合併したことによって誕生した市であるが、本稿では旧潮来町の区域(以下、潮来)を研究対象地域として扱う。

潮来は、古墳時代に大和朝廷が東北地方へ勢力を伸ばす際の拠点として開発されるようになっていった。また、これと並行して「板来の駅(いたくのうまや)」<sup>3)</sup>がおかれ、常陸国府のある石岡から鹿島神宮への中継地としての機能も有していた。これ以降、潮来は交通の要衝として発展していくこととなった。江戸時代になると、東北諸藩



第1図 研究対象地域

から江戸へ運送される荷物の中継基地と霞ヶ浦周辺の水運網の集積地としての位置づけも有するようになった。潮来の重要性に関しては、源頼朝による長勝寺の建立や、水戸光圀が長勝寺に山門を移築するなど、歴代の支配者が活動拠点を設置し、整備したことからも読み取れる。

その後、主要な交通手段が水運から鉄道へと変化していく中で、水運で栄えた潮来も衰退していくこととなった。それに伴い、潮来は交通の要衝から観光地としての側面を強めるようになっていった。江戸時代にも観光地として栄えていた潮来であったが、明治時代以降は新聞などでも潮来に関する特集が組まれるようになったことでさらに人気を博した。

第二次世界大戦を経て、高度経済成長期以降は観光地化が顕著となった。1952年からは水郷潮来あやめまつり（以下、あやめまつり）が開催され、

あやめが見頃を迎える5月下旬から6月下旬にかけて観光者の目を楽しませている。1959年には前川あやめ園（現：水郷潮来あやめ園）などが水郷国定公園の一部として定められた。また、高度経済成長期には映画や歌謡曲などに頻繁に取り上げられたこととマストツーリズムの興隆により知名度がより高くなっていった。さらに、鹿島開発に伴って首都圏から鹿島臨海工業地帯への陸上交通網が整備されるようになり、1970年には潮来町内で初めての鉄道である国鉄鹿島線（現：JR鹿島線）が開業した。1987年には東関東自動車道が潮来ICまで開通し、鹿行地域と首都圏の間における陸上交通の要衝としての位置づけを持つようにもなった。現在、潮来は東京駅から直通バスが一日88便出ている。所要時間はおよそ80分であり、都内への通勤圏としての性格も有している。

## II 生活の場としての水郷

### II-1 潮来における舟運の盛衰

本節は潮来町史編さん委員会(1996)に基づき、水郷としての潮来の歴史を詳述する。

江戸時代には、幕府や領主などによって大規模な河川工事が行われ、水運の整備が推進された。これは主に、年貢や領内の各種必需品を運送・調達するためであった。潮来に関しても例外ではなく、徳川幕府による利根川の東遷事業によって、江戸に通じる内陸水路の中継地として発展した。しかし、18世紀前半に潮来を通る江戸廻米の「内川廻し」ルートの一部が銚子を経由するルートへと切り替えられたことで、水運の中継地としての機能は衰退していくこととなった(植田, 2009)。

潮来が再び活気を取り戻す契機となったのは、当時流行していた水郷遊覧であった。江戸時代中期には、関東各地の庶民だけではなく松尾芭蕉などの文人の間にも遊覧行為が流行したことで来訪者が増加した。また、東国三社と呼ばれる、鹿島神宮、香取神宮、息栖神社の三社参りに訪れる人々も増加した。三社参りの参拝者や水郷遊覧を楽しむ観光者は、木下茶船など利根川や霞ヶ浦の川船を利用し、道中には名勝として、また観光地としても著名であった潮来を訪問した。この時期、潮来には遊郭も成立し、歓楽地としても栄えた。その後、座敷で踊られる「菖蒲踊り」や水郷情緒を「あやめ」に込めた俚謡「潮来節」が江戸で流行したことと相まって、江戸時代後期には潮来の遊郭は全国的に知られることとなった。最盛期には、遊女屋9軒、遊女95人、年間遊客24,200人、遊興金は16,940両に及んだ。

その後、1800年代後半に、国内で鉄道への注目が集まり、日本鉄道をはじめとする幹線鉄道網の建設が進んだ。これによって、沿岸海運及び河川舟運は、陸上輸送に代替されるようになった。潮来周辺地域も、成田鉄道の開業により大きな影響を受けることとなった。1897年に成田駅-滑河駅間が開業したことで、滑河駅に近い源太河岸が利根川水運と成田鉄道の結節点の役割を持ち、下利

根川、霞ヶ浦、北浦方面からの旅客が源太河岸と滑河駅を利用して、成田及び東京方面へ乗り継ぐようになった。翌年に佐原駅まで開業すると、旅客の乗り継ぎ及び貨物の積み替えは佐原駅で行われるようになった。このような陸上鉄道網だけでなく、自動車や道路網、橋梁が発達してゆく一方で潮来地方の繁栄を支えてきた舟運は、大正末期から昭和初期にかけて物資輸送の地位を低下させていった。

### II-2 水路が作り出す景観

明治時代の潮来では、前川を挟んだ対岸に水田地帯が広がり、その西岸には江間(えんま)と呼ばれる水路が網目状に張り巡らされていた。当時は江間を移動する際、江間の水底に長い木の棒を刺し、棒高跳びの要領で水田間を移動する「エンマハネ」という移動法や舟<sup>4)</sup>を用いるなど、生活に根ざした景観がみられた。江間の水は農業用水や生活用水として利用されており、水路は住民の生活に密着したものであった。住民への聞き取り調査<sup>5)</sup>によると、家ごとに舟を所有しており、農地間の移動のほか、買い物や通学などでの移動手段としても利用していた。また、当時の水質は良好であり、子供たちは泳いだり、フナやウナギを捕まえたりするなどの遊び場としても利用されていた。しかし、高度経済成長期とともに工業廃水や生活排水が多く排出されるようになり、水環境は悪化していったとのことである。

また、台風による被害も深刻であった。潮来の中心市街地は緩傾斜地にあるため、氾濫した水は自然に流路に戻る一方、低湿地の水田地帯では水が幾日も溜まってしまふことが多かった。かつては、常陸利根川の幅が現在の3分の2程度であったため、単位面積あたりの流量が多かったことも影響していると考えられる。

1960年代になると、鹿島開発に伴う工業用水確保のための河川幅拡張と護岸工事が行われた。また同時期には、土地区画整理事業によって水田が埋立てられ、宅地や道路等への大規模な転換があった。住民からの聞き取りでは、これらの工事



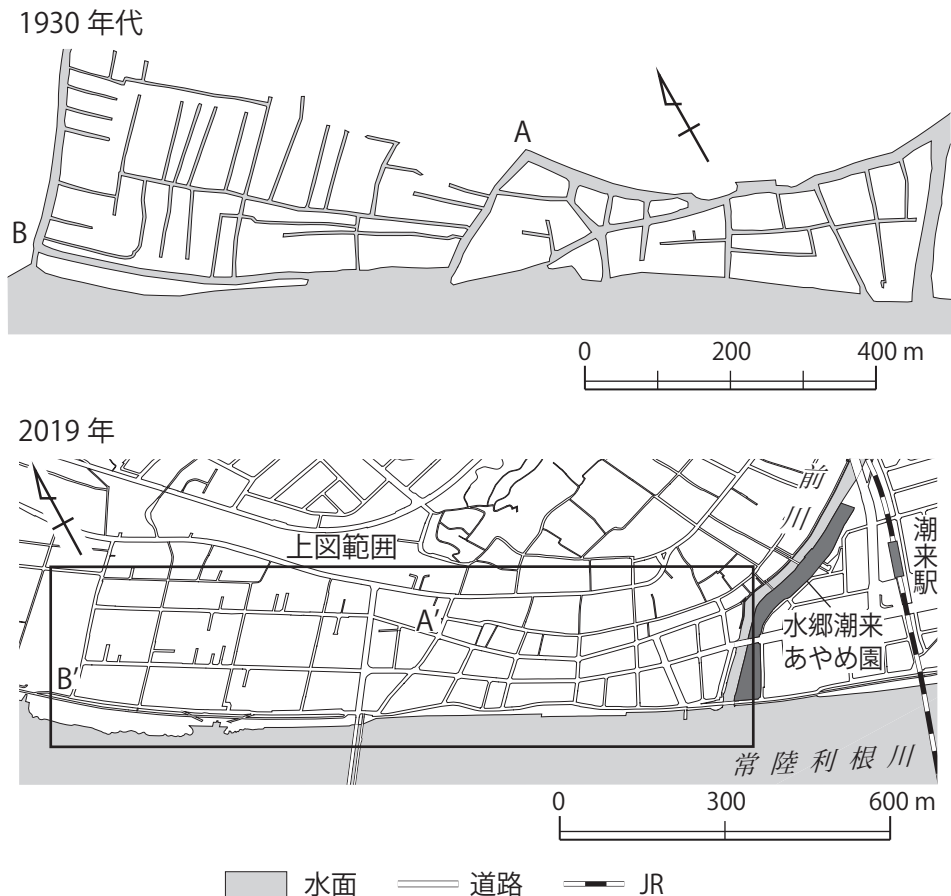
がなされる以前にあっては、江間や常陸利根川、前川に沿って自生するあやめや芦、葦が咲き誇っており、風情があったとのことである。工事完了後は、台風による水害は減少していったものの、水路や日常的な舟の利用、水路や川沿いに自生するあやめといった、生活に根ざした伝統的な水郷景観は消失した。

### Ⅲ 水路の埋立てと水郷のコンテンツ化

#### Ⅲ-1 水路の埋立て概要

住民の生活の舞台になっていた水郷であるが、昭和時代中期になると、モータリゼーションの進行により水路の需要が減少していくこととなった。

特に大きな変化をもたらしたのが、市街地を下流していた園部川の埋立てである。第2図で示したように、園部川は市街地の南側を流下し、園部川以南は田畑が卓越する農業地帯であった。しか



第2図 1930年代と現在の潮来市街地

注1) AとA'、BとB'はそれぞれ同一地点であるが、潮来町地番及別地目入図は手書きの地図であるため、地理院地図と完全には一致しない。

注2) 潮来町地番及別地目入図には道路の記載がなされているが、明瞭ではなかったため本図では省略している。

(潮来町地番及別地目入図と地理院地図、聞き取り調査より作成)

し、1960年代に園部川の西側の一部が埋め立てられ、園部川を流れる水量が減少した。これにより、水かさが減少し舟の通行が難しくなるとともに、水の流れが悪くなったことで水質の悪化が引き起こされた。これに対し、園部川の改善をしようと再度掘り起こしをしたものの水質は改善せず、園部川は全て埋め立てられることとなった。水路の埋立てはそれまでの水郷の生活から離れる契機の一部になったと考えられる。

住民への聞き取り調査<sup>6)</sup>によれば、第二次大戦後の落ち着きを取り戻す頃は、潮来南西部に位置する浜町にあった遊郭に訪問者がみられたとのことである。遊郭街であった浜町近くには園部川が流れており、潮来や鹿島、神栖の人々が舟で訪れた。このとき、遊郭の客は家の米をこっそり懐に忍ばせ、その米を代金として芸者と遊んだ。また、酒蔵の杜氏であった者は一升瓶を持参したという。舟は免許が不要かつ静かに移動できるため便利であった。遊郭から見える水路と舟から見る遊郭一帯は、それぞれ訪問者を楽しませる景観であったと想像される。しかし、園部川の埋立て以降、遊郭への客足も遠くこととなった。

その後、鹿島開発の初期には遊郭も接待の場として利用されたものの、前島（2001）によれば、昭和50年代には、浜町の遊郭は衰退することとなった。これは、鹿島周辺の開発に伴って接待の場が鹿島に移動したためと考えられる。

本調査では、当時の経緯や初期の埋立て範囲を明らかにすることはできなかったものの、住民へ

の聞き取り調査から、モータリゼーションと都市化の進展が水路の埋立てに影響したことが示唆された。自家用車の登場により、陸上交通を分断してしまう水路の相対的価値は急激に減少していったと考えられる。また、園部川以南の農業地帯が住宅地や宿泊施設・土産物屋などへと転用されていく過程で、水路の需要が減ったことも影響していると考えられる。

### Ⅲ-2 潮来のコンテンツ化

1950年代から60年代にかけて、当時隆盛を極めたコンテンツであった映画や歌謡曲などに潮来が題材として取り上げられた（第1表）。代表的な映画としては1955年に美空ひばり主演による『水郷哀話・娘船頭さん』があげられる。また、歌謡曲では、1959年に『潮来船頭さん』、1960年『潮来花嫁さん』と『潮来笠』、1964年の『潮来舟』、1966年『潮来子守唄』があげられる。特に、『潮来花嫁さん』と『潮来笠』は当時高い人気を博し、1960年のNHK第11回紅白歌合戦において紅組と白組それぞれで歌われた。

このように、潮来はコンテンツの題材としてしばしば利用されてきた。それに伴い、潮来での観光が隆盛を極めていった。1950年代から水郷潮来あやめ園の整備やあやめまつりなどが始まり、遊覧船業者も誕生した。また、1959年に潮来一帯が国定公園に定められ、観光地として人気が高まった。日本交通公社が1970年に発行した旅行案内の「房総・水郷」の巻において、娘船頭によるろ船

第1表 潮来を題材にした歌謡曲と映画

	タイトル	発表年	歌手・主演	備考
歌謡曲	潮来夜船	1939	北廉太郎	
	潮来船頭さん	1959	和田弘とマヒナスターズ	
	潮来花嫁さん	1960	花村菊江	第11回NHK紅白歌合戦出場（1960）
	潮来笠	1960	橋幸夫	第11回NHK紅白歌合戦出場（1960）
	潮来舟	1964	大月みやこ	
	潮来子守唄	1966	都はるみ	
映画	水郷哀話・娘船頭さん	1955	美空ひばり	
	潮来笠	1961	小林勝彦	歌謡曲の「潮来笠」を映画化

をこぐ写真が表紙に採用されており<sup>7)</sup>、水郷が観光地として人気があったことがうかがえる。

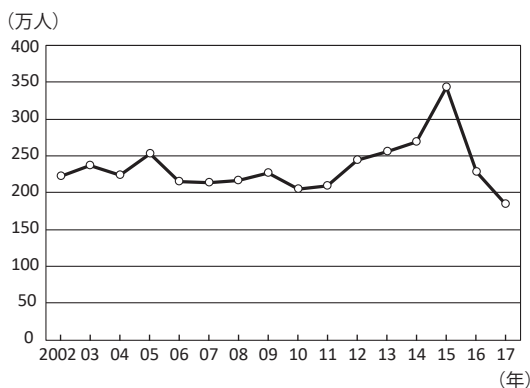
一時は水郷コンテンツとして人気を博した潮来であったが、1960年代以降登場することは少なくなった。しかし、1978年の成田国際空港開港や1985年の筑波万博開催、また首都圏と成田国際空港・鹿行地域を結ぶ東関東自動車道の開通などによって、一定の観光者の来訪があった。

#### IV 観光の場としての水郷

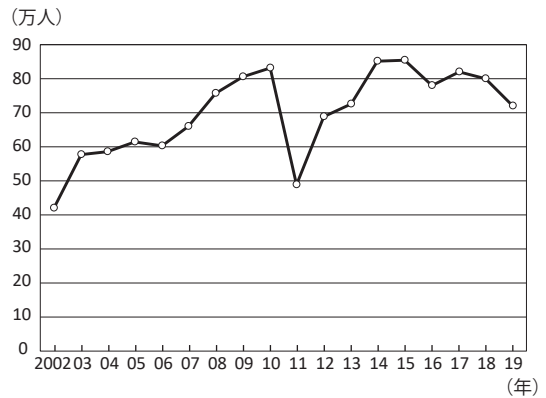
##### IV-1 潮来の水郷観光概要

現在の潮来の観光を概観するため、潮来の観光者数の推移を第3図に示す。2002年から2017年にかけて、年別の入込客数はおよそ200万人強で推移しており、2015年には340万人を記録している。次にあやめまつり開催期間中の入込客数を第4図で確認すると、東日本大震災が発災した2011年を除くと、2008年以降はあやめまつり開催期間中の入込客数が潮来市の年間入込客数の3分の1以上にあたる80万人前後で推移しており、あやめまつりも潮来市における観光の基盤の一つといえる(第4図)。

第2表に観光者の内訳をまとめる。日帰り客が8割強、宿泊客が2割弱となっており、観光者の多くが日帰りで潮来を来訪していることが特徴としてあげられる。また、鉄道や高速バスなど、東



第3図 潮来市年間入込客数推移  
(潮来市資料と茨城県観光客動態調査報告より作成)



第4図 水郷潮来あやめまつり入込客数推移  
(潮来市資料と茨城県観光客動態調査報告より作成)

京や成田空港などと潮来を結ぶ公共交通機関は整備されているが、それらを利用して訪れる観光者は少なく、貸し切りバスや自家用車による観光者が約9割を占めている。観光者の年齢層などについての統計は得られなかったが、市役所などへの聞き取りによると高齢者が主であることが明らかとなった。また、近年は少数ながらアジアなどからの外国人観光者もみられる。

次いで観光者の発地を明らかにするため、2019年のあやめまつり期間中のナンバープレート登録地別駐車台数を第5図に示す。サンプル数は1,092台であり、そのうち不明30台と調査日16日間の合計が10台に満たないものを除き、計1,043台を示した<sup>8)</sup>。これをみると、茨城県が526台と最も多く、それに続いて千葉県257台、埼玉県71台、東京都63台、神奈川県59台、栃木県35台、群馬県18台、福島県15台となっている。また、10台未満のものに関しては山梨県4台、静岡県・岡山県3台、愛知県2台であり、その他福井県・大阪県・三重県・福岡県・大分県はそれぞれ1台であった。以上より、自家用車での来訪者は関東在住者が多く、特に茨城県と千葉県が突出していることが示された。

あやめまつりは水郷潮来あやめまつり実行委員会の主催で毎年5月下旬から6月下旬にかけて開催される。会場である潮来水郷あやめ園は1956年に開園し、入園は無料で水郷観光の中心地といえ

第2表 宿泊・居住地・利用交通機関別の入込客数

(単位：万人)

		2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年
入込客数合計		223.72	253.46	215.58	213.16	216.32	226.18	204.52
宿泊の有無	日帰り客	192.40 (86%)	197.70 (78%)	181.09 (84%)	187.58 (88%)	186.04 (86%)	202.57 (90%)	174.03 (85%)
	宿泊客	31.32 (14%)	55.76 (22%)	34.49 (16%)	15.58 (12%)	30.28 (14%)	23.61 (10%)	30.49 (15%)
居住地	県外客	192.40 (86%)	174.89 (69%)	157.67 (73%)	136.42 (64%)	134.12 (62%)	153.30 (68%)	145.52 (71%)
	県内客	31.32 (14%)	78.57 (31%)	58.21 (27%)	76.74 (36%)	82.20 (38%)	72.88 (32%)	59.00 (29%)
利用交通機関	鉄道・定期バス	38.03 (17%)	25.35 (10%)	17.25 (8%)	17.42 (8%)	43.63 (20%)	24.86 (11%)	23.57 (12%)
	貸切バス	78.30 (35%)	38.02 (15%)	17.25 (8%)	45.62 (21%)	33.42 (15%)	28.58 (13%)	24.21 (12%)
	自家用車 その他	107.39 (48%)	190.09 (75%)	181.08 (84%)	150.12 (70%)	139.27 (64%)	172.74 (76%)	156.73 (77%)

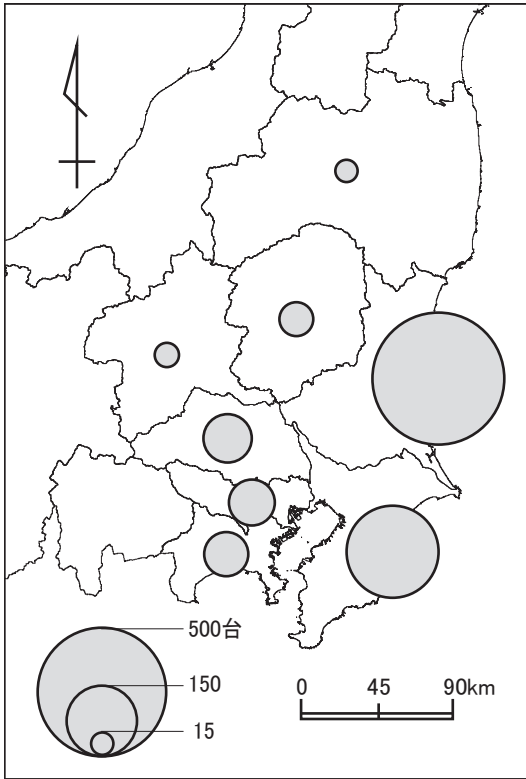
(茨城県観光客動態調査報告より作成)

る(写真1)。第6図にあやめ園とその周辺にある観光地点を示した。あやめ園では、あやめまつりの時期になると約500種100万株のあやめを楽しむことができる。あやめまつり期間中は園内で多くのイベントが行われ、そのうち最も人気を博しているものが実際の花嫁をろ舟に乗せ前川を下る「嫁入り舟」のイベントである。他にも、ろ舟で前川を約30分かけてまわり水郷情緒を味わえる「ろ舟遊覧」や人力車による周遊もまつり期間中に行われており、いずれも市から潮来市商工会へ運営が委託されている。あやめまつりにはボランティアも多く携っており、観光ガイドを行う団体や観光者に対し無料でお茶などを提供する団体などがみられる。これらボランティア団体と市との関わりとして「観光ボランティア連絡協議会」があり、市が各団体から意見の吸い上げなどを行っているが、直接的に市が講習など事業を行うことはなく、それぞれのボランティア団体が独自に活動を行っている。ボランティアや市役所への聞き取りから、ボランティアに参加する人のほと

んどは定年退職後の高齢者であり、鹿島開発などで潮来市に移住してきた人が多く見られるということが明らかとなった。

商工会の実施するろ舟運行に対し、民間業者による遊覧船観光は通年で行われており、水郷観光の重要な要素となっている。こちらは手漕ぎではなくモーター付きの船が利用されており、現在は5つの業者が運営している。すべての業者で同じ周遊コースと値段を設定しており、前川十二橋コースと常陸利根川を挟んで隣接する千葉県香取市の加藤洲・与田浦をめぐる加藤洲十二橋コース(A～C)の計4コースがある(第7図)。前述の嫁入り舟やろ舟遊覧はあやめ園内にあるろ舟乗り場から出航し、民間業者による遊覧船乗り場は前川と常陸利根川の結節点付近に集中している。次いで、潮来の観光資源としてあげられるのは水郷旧家磯山邸である(第6図)。磯山邸は明治時代に建築された日本家屋で、2008年に元の所有者から市に寄贈され、2019年4月からは株式会社いたこが指定管理者となっている。2016年には





第5図 あやめまつり臨時駐車場におけるナンバープレート登録地別駐車台数（2019）  
（潮来市資料より作成）



写真1 あやめ園

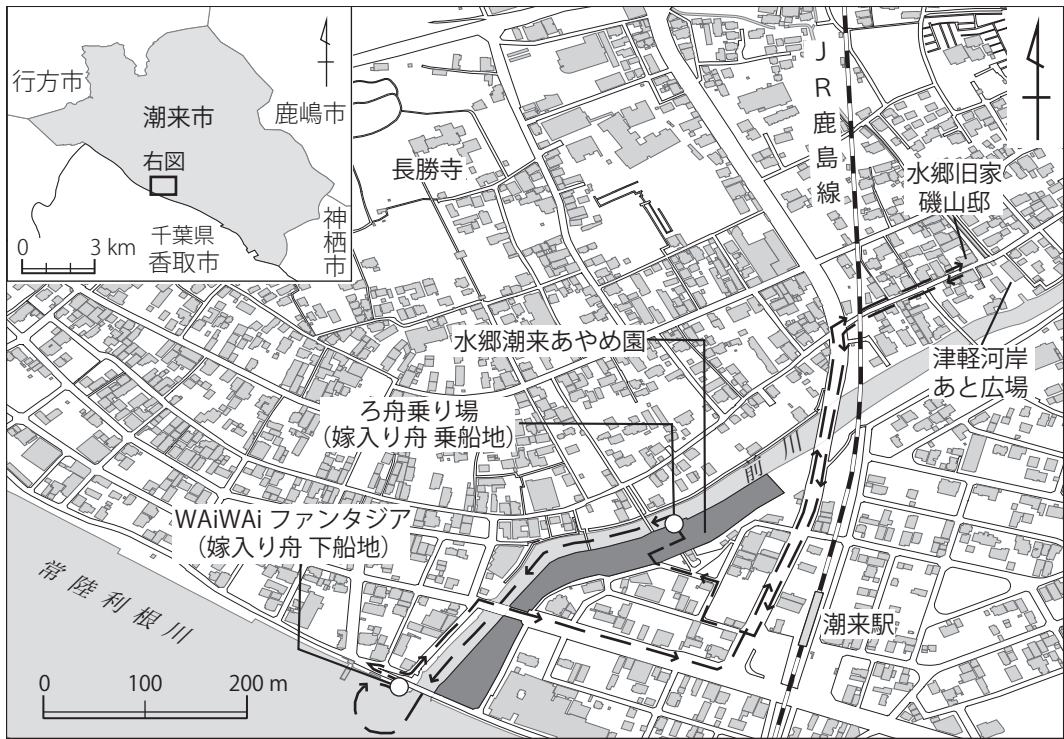
あやめが咲き誇る中を散策できる。あやめ以外に、カキツバタや花菖蒲も植えられている。写真左側には藤棚から垂れ下がる藤の花がみられる。

（2019年6月 松山撮影）

地方創生事業のひとつとして耐震補強を含むリノベーションが施され<sup>9)</sup>、産業・観光振興や移住定住促進に関する事業の拠点となった。具体的には、七五三参りなどの季節行事やあやめ染め体験といったワークショップの会場、そして移住体験の場（簡易宿泊所）などとして利用されている。また、あやめまつり期間中は嫁入り舟の出発点として写真撮影などを行う場所にもなっている。その向かいに新たに建築された「津軽河岸あと広場」は、江戸時代に津軽藩が物流拠点として使っていた津軽河岸跡を広場に整備したもので、2019年5月に完成した。磯山邸と同様、株式会社いたこが管理を行っている。既存の大谷石づくりの蔵は改修工事により多目的に利用できる空間に整備され、今後は飲食サービスや特産品販売を行うテナントが出店する予定である。そのほかにも観光案内所や屋外トイレ、船着場が整備されており、新たな観光拠点として期待されている。

前述のように観光者の多くが自家用車や観光バスで来訪することから、あやめまつり期間中にはあやめまつり実行委員会が大型商業施設跡地を借りて臨時駐車場を確保し、またこのような観光地を周遊できるように潮来駅前から無料の周遊バス（あやめまつり期間中の土日のみ）やレンタサイクルも用意されている。

上記以外の潮来市の主要観光地として「道の駅いたこ」がある。道の駅いたこは2002年に開業した。東関東自動車道の終点（2019年現在）である潮来ICの近くに位置し、株式会社いたこが運営を行っている。地元の朝取り野菜や地元特産品を取り扱っており、レストランやグランドゴルフ場なども併設されている。市内無料送迎バスが運行するなど潮来市中心市街地からのアクセスも整備されており、繁忙期はお盆や年末年始に加えて隣接する鹿嶋市の鹿島スタジアムでサッカーの試合が行われるときである。そのため道の駅いたこは、潮来ICから鹿嶋市など潮来市周辺の他地域へ行く観光者が立ち寄る施設であると考えられ、潮来市の水郷観光からは独立した存在であるといえる。



「嫁入り舟」イベントで使用されるルート — →

第6図 潮来市街地における観光地点と嫁入り舟ルート

#### Ⅳ-2 行政による観光の取り組み

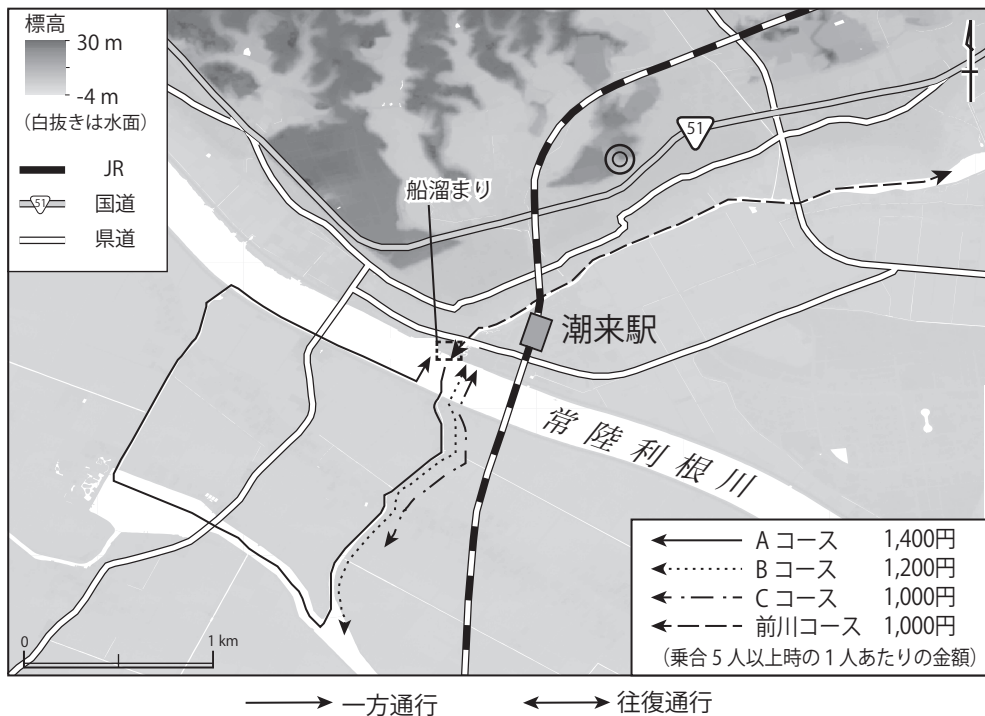
あやめまつりの中でもひと際注目されているイベントが「嫁入り舟」である（写真2）。昭和時代初期までの潮来では、手漕ぎ舟に花嫁と嫁入り道具を載せ、嫁ぎ先の家まで送り届ける景観がみられた<sup>10)</sup>。しかし、水路の埋立てやモータリゼーションの進行により、陸路を中心とした生活スタイルに変化したことで、嫁入り舟をみる機会もなくなった。

この古くからの潮来の風習を観光に役立てようと、1984年から潮来市商工会青年部が嫁入り舟を復活させた。2019年現在、嫁入り舟はあやめまつり期間中の水曜、土曜、日曜日の合計29回実施されている。

2019年現在の嫁入り舟の内容は以下の通りである。まず、全国から参加者を募り、その中から抽選でイベントに参加するペアを決める。応募資格は、嫁入り舟実施日の一年以内に結婚した、ある

いは結婚する予定のあるペアである。2019年は55組の応募があり、29組がイベントに参加した。第8図は、2019年の応募花嫁の出身地を示している。55名応募のうち関東出身者は46名となっている。関東地方内では茨城県が30名と圧倒的に多いが、潮来に隣接する千葉県からも7名の応募があった。茨城県内に目を向けると、開催地である潮来市が最多の7名であることをはじめ、行方市5名、鹿嶋市4名、銚田市4名など鹿行地域の出身者が多い（第9図）。また、関東地方以外からの参加者も9名おり、その内訳は中部地方4名（新潟県、長野県、愛知県、石川県各1名）、秋田県、大阪府、福岡県、台湾、出身地不明各1名となっている。

嫁入り舟の当日は、和装で着飾った花嫁とその両親が磯山邸からあやめ園まで人力車に乗り、公園内をゆっくりとろ舟乗り場まで歩く（第6図）。公園内では花嫁と花婿のプロフィールが放送され、観光者にも二人が紹介される。ろ舟乗り場で



第7図 遊覧船の経路

注) 遊覧船の乗合人数が5人に満たない場合は貸し切りプランとなる。貸し切り時は、Aコースが7,000円、Bコースが6,000円、C・Dコースが5,000円である。

(遊覧船業者資料より作成)

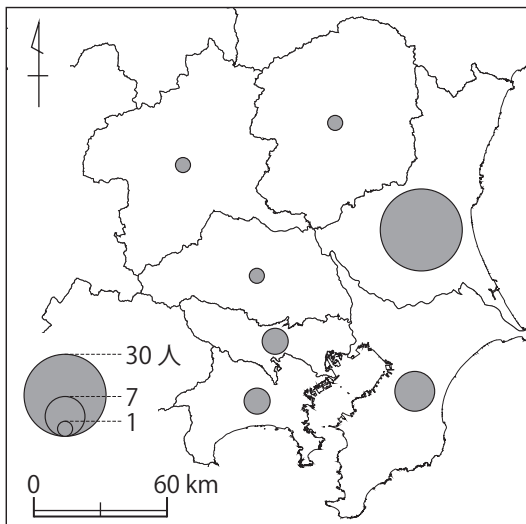


写真2 嫁入り舟

花嫁と両親が舟に乗船し前川を下流する。観光者にとって観光イベントの一つとなっている。

(2019年5月 坂本撮影)

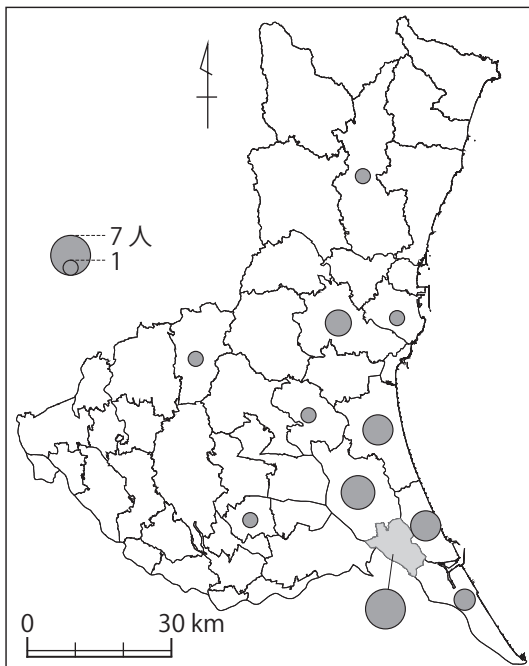
は、嫁入り道具を載せた舟が待機しており、花嫁とその両親が乗船する。花嫁らに乗せた舟はゆっくりと前川を下り、花婿が待つ前川水門橋の



第8図 潮来花嫁応募者の居住地 (関東)

(潮来市資料より作成)





第9図 潮来花嫁応募者の居住地（茨城県）  
（潮来市資料より作成）

たもと、噴水施設のWaiWaiファンタジアで下船する。そこからは、花嫁と花婿が揃って自動車に乗り、出発地である磯山邸へと向かう。花嫁や花婿は、イベントを通して観光者から祝福の言葉が投げかけられることが多い。

磯山邸からあやめ園までの経路に人力車を用いるようになったのは2016年からである。潮来市職員によれば、人力車を用いる理由は「より風情があるため」という。人力車を始めるにあたって、当初は浅草から車夫を呼び運行していたが、現在は市役所の職員がボランティアとして積極的に運行に携わっており、招聘した車夫と共同で運行している。また、車夫育成のための「人力車車夫養成塾」も開催されており、地域住民の育成にも力を入れている。

また、嫁入り舟が復活した同年に、水郷文化の伝聞と観光資源の創出を目的として、潮来市商工会青年部が観光者向けのろ舟遊覧の運行も始めた。ろ舟遊覧ルートは、あやめ園内の乗り場から出発し、前川の上流側である津軽河岸の方向へ運

航し、河岸を過ぎた二つ目の橋で引き返す。前川を下りながら乗り場を通過し、あやめ園内にある橋で折り返し乗り場に戻る経路になっている。ろ舟の船頭は男性だけでなく、女性の船頭も多い。これは、古くから潮来にいた娘船頭を再現しているためである。

かつて潮来では、男性が農作業に従事し、女性は船頭として物資や旅客を運び生活をしてきた。これが、1955年に美空ひばりを主演とした『水郷哀話・娘船頭さん』で映画化され、一躍人気となった。現在も「娘船頭」は潮来の観光資源として継承されている。現在の娘船頭を担っているのはろ舟保存協会と市役所職員のボランティアであり、2019年現在、10人の娘船頭が活躍している。

#### IV-3 遊覧船業者の現状

##### 1) いたこ丸

いたこ丸はあやめ園の対岸、北利根川と前川水門付近に位置する、飲食店兼遊覧船業者である。創業は1960年代で、潮来市民ではなかった初代オーナーが潮来の観光の盛況ぶりに目をつけて事業を開始した。

潮来の観光が盛んであった1960～70年代には、企業の慰安旅行先としての性格も有しており、多くの来訪者が時期を問わず訪れていた。しかし、潮来の観光が衰退していくに伴い、飲食業と遊覧船業ともに売り上げが低下していった。現在もいたこ丸の遊覧船業は通年実施しているが、潮来市の観光者動向と同様に、あやめまつり期間中の6月に突出して乗船者が多い。遊覧船を利用する客は主に60歳代以上の高齢者に偏っており、リピーターも存在している。また近年は、インバウンドの増加に伴い、アジア系の外国人客が乗船することもある。

いたこ丸の遊覧船の船頭をみると、あやめまつり期間中は6名が雇用されており、その多くが潮来市対岸の千葉県香取市の農業従事者である。あやめまつり期間外は観光者が多くないため、基本的には6名の船頭のうち2名で運行している。また、香取市の農家の中には、船舶免許を

取得し、潮来で遊覧船の船頭になるような者もいる。その背景として、小さい頃から水路と田に囲まれた環境で育ち、舟の利用に親しんでいたことがあげられる。

住民への聞き取り調査<sup>11)</sup>によると、香取市の農家は舟を用いて潮来で賃金を稼ぐことが多かったとのことである。もともと農家は自宅から畑まで舟を使用し、同時に潮来地区に買い物しに来る際にも舟を利用していた。こうした生活の中で行っていた舟での移動を、観光として利用し始めたのだという。次第に加藤州の中でも船頭の組合ができ、一時期、加藤洲の農家の女性は全員が船頭経験者であったという。

近年、高齢化と後継者不足のため、いたこ丸の全ての遊覧船にモーターを設置した。遊覧船の運行は、手漕ぎとモーターを組み合わせて行っている現状である。

## 2) 潮来遊覧船組合

潮来遊覧船組合は前川水門と潮来大橋の間で、北利根川の沿岸で位置している。今の社長は三代目であり、船頭は5人でそのうち千葉県出身が4人、潮来出身が1人である。船頭の多くは、前職を退職した後に船舶免許を取得している。

潮来遊覧船組合は通年営業しているが、最も力を入れている時期は、あやめまつり期間中の6月である。乗船客は高齢者が多く、成田空港から来るアジア系外国人客もいる。観光者の多くは、ツアーバスか自動車を利用し、潮来を経て銚田や大洗、あるいは銚子などの観光地を巡る。そのため潮来での宿泊は少ない。

## V 観光空間としての水郷の創造

### V-1 水郷の変容

潮来は古代より交通の要衝であり、近世には水郷として観光・歓楽地として栄えた。そして観光・歓楽地としての潮来は、日常的なる舟の利用、水路や川沿いに自生するあやめや芦、葦といった、景観の上に成り立つものであった。観光・歓楽地

としての潮来の基盤となるこの景観は、いわば水郷地域に適応した、住民の生活に根ざした伝統的水郷景観であった。しかし、水路の埋立てにより伝統的水郷景観は大きく変化した。住民の移動手段は舟から自動車へと転換し、それまでの水路が入り組む景観は消失してしまった。もちろん、モータリゼーションの進行は住民の生活の利便性を向上させ、都市としての発展に大きく寄与したことは想像に難くない。

一方、住民の生活の舞台が水辺から陸地へと転換されていくタイミングで、水郷としての潮来が映画や歌謡曲で取りあげられることとなった。その中では、舟を漕ぐ女性を主人公としたり、嫁入りを舟で行う習慣を表現したりと、住民の生活と水郷景観が結びついていた様子が描かれた。この時期は、住民が伝統的な水郷の生活から脱却するタイミングで、メディアによってその生活が注目され、観光資源として注目されるようになっていった時代と捉えられる。

このような状況の中で、新たな資源として水郷が再構築されていくこととなる。それは、水郷としてテーマパークのような観光を提供できる場の創出であった。遊覧船業者の聞き取りによれば、観光地としてにぎわいをみせた潮来をビジネスチャンスとした創業者が、新たに事業を開始し、観光者を迎え入れることとなる。それは、以前から副収入として観光に従事していた農家とは異なり、移住者によって観光地水郷が作られていくことである。その点においても、水郷は住民の生活に根ざしその上に成り立つものではなく、観光者の視点に基づくものとなったといえよう。そしてその契機となったのは、映画や歌謡曲といったメディアのコンテンツとして取り上げられたことである。

一方、住民も水郷としての景観を創出する活動を始めていく。特に、1953年より始めたあやめまつりによって、水郷の新たな資源化が図られた。また、その活動は町営（現、市営）のあやめ園の整備へとつながるなど、行政を巻き込むものへと発展していった。しかし、それ以降は行政による



整備が中心となり、現在は住民の関与は少なくなっている。

以上をまとめると、生活の場としての水郷が近代化の過程で消失していく一方、メディアによって取り上げられることで、新たな観光空間として水郷が再編されてきた。その過程では、これまでの水郷とは異なる景観であったものの、観光の場としての水郷へとその形態を変化させてきた。当初、観光としての水郷空間を形作ってきたのは住民や遊覧船業者などであった。住民自らあやめを植え付け、疑似的な水郷空間を作り出していったことは、喪失した過去の景観の再現であったと捉えられよう。しかし、観光者が増加する中で、担い手が住民の行政へと変わったことにより、住民の抱く水郷から切り離されて新たな水郷が形成されていったと考えられる。さらに住民の世代交代が進んだ結果、現在は過去の生活の場としての水郷の記憶は薄くなっており、水郷は作り出された景観へと変化していると考えられる。

## V-2 潮来における水郷観光の展開

潮来の水郷観光を理解する上で欠かせない要素としてコンテンツ・ツーリズムがあげられる。あやめ園に設置されている記念碑からは潮来に関する曲などが流れるようになっており、昭和の歌謡曲が観光資源になっていると考えられる。住民への聞き取り調査からは、歌謡曲のヒットとともに観光者が増加したことが示されたが、本稿では1950年代以降の観光統計が存在しなかったため、歌謡曲による観光への影響を議論することは難しい。

そのため、本稿ではその影響を指摘する程度にとどめ、本章では、主に今回の調査で明らかとなった2002年以降の潮来における観光動向から、水郷観光の展開を明らかにする。先述のように、潮来の観光は5、6月のあやめまつりに集中している。あやめまつりの入込客数は、年ごとに変動しながらも増加傾向にある。増加の理由としては、期間中のイベントの拡大が考えられる。例えば、あやめまつりのメインイベントである嫁入り舟では、

年々イベント内容を多様にしている。磯山邸からの人力車による花嫁運送は、近年始められたものであり、そのために他県から人力車の車夫を雇用するなど、積極的に力を入れていることがわかる。また、こうしたイベントの中身の拡大にともない、利用する空間の拡大もみられる。これにより、あやめ園周辺の観光だけではなく、潮来市街地に存在する他の施設のアピールにもつながっている。2019年には磯山邸の向いに新たに河岸と倉庫を建設するなど、水郷観光地点の強化もみられ、観光地としての空間の拡大を図っている。また、磯山邸や人力車、河岸という、歴史性を帯びる観光資源と嫁入り舟を結びつけることで、イベントが伝統的な格式あるものとして新たな意味を獲得していると考えられる。

一方、潮来の遊覧船業者の経路は香取市内の水路巡りを主としており、現存する水郷としての景観が潮来からは消失しかけている。今後は、先述したような歴史的資源と水郷景観を組み合わせる取り組みが重要となってくるだろう。

## VI おわりに

本稿では、茨城県潮来市における水郷空間の変容を明らかにした。その結果、以下のことが明らかとなった。

生活の場としての水郷は、1960年代の水上交通から陸上交通への移行に伴う土地区画整備や鹿島開発の影響によって、水路の埋立てや河川改修がなされ、消滅することとなった。一方、同時代に映画や歌謡曲などのメディアによって、潮来が取り上げられた。メディアは、水郷での生活の様子や景観を題材にしたものが多く、これを機にコンテンツ・ツーリズムが進展した。しかし、すでにこの段階では、生活の場としての水郷空間は消失しており、メディアで取り上げられた水郷と現実とが乖離したものとなっていた。そのため、水郷としての潮来は住民の生活に根ざし、その上に成り立つものから、観光者のイメージに沿うようなものへと変化した。すなわち、伝統的な水郷とは

異なる新たな水郷が形成されていったといえる。この背景には、コンテンツ・ツーリズムの進展とともに、住民の水郷に対する、日常生活の舞台から観光のために創出・整備する必要がある場所へと変化した視線（まなざし）が関係している。

さらに、水郷空間はこうした住民の生活や視線の変化とともに、観光者の増加に目を付けた人びとが観光業に新しく従事することで、観光地として発展していくこととなった。また、その過程で住民の世代交代が進んだことも合わせ、生活の舞台としての水郷から観光地としての水郷への転換に拍車がかかったと考えられる。

以上のように、潮来では住民の生活に伴う景観変化と逆行する形で観光地としての水郷整備が進む中で、住民の生活や文化と乖離する観光空間が形成されていった。地域と密着したコンテンツで

あったものが、メディアによって地域から切り離されたことでイメージが一人歩きし、観光の対象となっていく。地域の文化を題材とするコンテンツ・ツーリズムは、短期間に行われることで総合的な観光整備を促すものの、本稿のように長期間に渡ることによって景観やその基盤となる生活様式が消失する事例もみられる。生活様式や文化から乖離したコンテンツの維持は、作られた景観を必要とすることが多い。そのため、維持管理には多大な労力が必要となり、その後の持続的な展開に影響を及ぼすことが危惧される。コンテンツ・ツーリズムに伴う観光景観の創出にあたっては、短期・長期的に、住民が自分たちの生活や地域の歴史を踏まえながらどのような景観を目指すか協議しながら進めることが肝要である。

本稿の作成にあたり、潮来市役所の榊原 徹様、実川治子様、潮来商工会の実川教生様、道の駅いたこの堀内信義様、あやめ旅館中根 猛様をはじめ、多くの方々から貴重な資料やお話を聞かせていただきました。特に、過去の潮来での生活に関しては住民の皆さまから快く当時の状況をお聞かせいただくことができ、参考にさせていただきました。以上末筆になりますが、お礼申し上げます。

#### [注]

- 1) 本稿ではコンテンツ・ツーリズムを増淵(2009)や山村(2014)、また国土交通省総合政策局、経済産業省商務情報政策局、文化庁文化部から提出された「映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査」をもとに以下の通り定義する。コンテンツとは「物語」や「作品」、そしてそれらを構成する諸要素(物語性、キャラクター、ロケーション、サウンドトラックなど)(山村, 2014)であり、そのコンテンツを通して醸成された「物語性」や「テーマ性」を地域固有の雰囲気・イメージに付加して誘客する観光をコンテンツ・ツーリズムとする。
- 2) 例えば、商店街(石坂ほか, 2016)や地域の神社(上田, 2011)があげられる。
- 3) 律令制において、駅使や官人の往来や文書を伝達するため、宿舎や人馬などを提供した施設。およそ16kmごとに設けられた。
- 4) 櫓を使用する小型の手漕ぎ舟。写真2を参照。
- 5) 2018年10月に80歳代男性に聞き取りした。
- 6) 2019年5月80歳代の女性3人に聞き取りした。
- 7) 日本交通公社が出版した1970年『最新旅行案内4 房総・水郷』の表紙。確認できた限りでは、1971年、1973年も同様の表紙であった。
- 8) 潮来市が潮来市シルバー人材センターに委託して実施した調査データを使用。調査場所はあやめまつり期間中のみ設けられる臨時駐車場で、調査日時は2019年5月31日(金)から6月11日(火)と6月15日(土)、16日(日)、22日(土)、23日(日)の16日間、臨時駐車場が開場している時間である。
- 9) 地方創生先行型及び地方創生加速化交付金事業による。
- 10) 全ての住民が嫁入りを舟で行ったわけではない。
- 11) 2018年10月に加藤州で生まれ、潮来地区に現住する1930年生まれの女性から聞き取りした。

## [文 献]

- 石坂 愛・卯田卓也・益田理広・甲斐宗一郎・周 宇放・関 拓也・菅野 緑・根本拓真・松井圭介 (2016) : 茨城県大洗町における「ガールズ&パンツァー」がもたらす社会的・経済的变化－曲がり松商店街と大貫商店街を事例に－. 地域研究年報, **38**, 61-89.
- 潮来町史編さん委員会 (1996) : 『潮来町史』潮来町役場.
- 上田明日香 (2011) : アニメ聖地巡礼の地理学:「けいおん!」を事例に. コンテンツツーリズム研究, 創刊準備号, 38-62.
- 植田敏雄 (2009) : 潮来の繁栄と水戸藩. 財団法人鹿嶋市文化スポーツ振興事業団編集『図説 鹿島の歴史 中世・近世編』鹿嶋市教育委員会, 92-93.
- 太田好信 (1993) : 文化の客体化－観光をととした文化とアイデンティティの創造－. 民族学研究, **57**(4), 383.
- 岡本 健 (2010) : コンテンツ・インデュースト・ツーリズム－コンテンツから考える情報社会の旅行行動－. コンテンツ文化史研究, **3**, 48-68.
- 川添 航・坂本優紀・喜馬佳也乃・佐藤壮太・渡辺隼矢・松井圭介 (2018) : 茨城県大洗町におけるツーリズム形態の変容に伴う観光空間の再編. 地理空間, **11**(1), 47-62.
- 金 玉実 (2015) : 映画『狙った恋の落とし方』による中国人の北海道道東観光の展開. 地理学評論, **88**(5), 514-531.
- 鈴木晃志郎 (2010) : メディア誘発型観光現象後の地域振興に向けた地元住民たちの取り組み－飢肥を事例として. 観光科学研究, **3**, 31-39.
- 高橋珠洲彦・山下琢巳・小口千明・古川 克 (2018) : 川越観光化にみる蔵造りへのまなざしとその変化. 城西人文研究, **33**, 1-48.
- 中谷哲弥 (2007) : フィルムツーリズムに関する一考察－「観光地イメージ」の構築と観光経験をめぐって. 奈良県立大学研究季報, **18**(1-2), 41-56.
- 前島裕美 (2001) : 近現代における地方小都市の盛り場の復元－水郷潮来の変遷を事例として－. 歴史地理学, **43**(4), 18-31.
- 増淵敏之 (2009) : コンテンツツーリズムとその現状. 地域イノベーション, **1**, 33-40.
- 増淵敏之 (2019) : 『「湘南」の誕生 音楽とポップ・カルチャーが果たした役割』リットーミュージック.
- 山村高淑 (2008) : アニメ聖地の成立とその展開に関する研究－アニメ作品「らき☆すた」による埼玉県鷲宮町の旅客誘致に関する一考察－. 国際広報メディア・観光学ジャーナル, **7**, 145-164.
- 山村高淑 (2014) : 交流の仕組みとしてのコンテンツツーリズム－21世紀型の観光まちづくりを考える－. 観光とまちづくり, **4**, 36-38.
- Riley, R., Baker, D. and Van Doren, C. S. (1998) : Movie induced tourism. *Annals of Tourism Research*, **25**(4) , 919-935.